

翻訳シフトと翻訳者の意識／無意識に関する予備的考察

Preliminary Analysis of Translation Shifts and Translators' Conscious and Unconscious Thinking

河原清志

Kiyoshi KAWAHARA

1. はじめに

本稿は翻訳に不可避的につきまとう原文テキストと翻訳テキストの齟齬ないズレ（シフト）が何に起因するのかについての予備的考察を行うことを趣旨とする。

そもそも翻訳等価（translation equivalence）は所与の絶対的なものではなく、一回一回の翻訳行為によって構築される多様性のある言語的営みである（河原, 2014a）。微視的に見ると原文と翻訳は（一般的な意味で）等価ではなく翻訳は不可能となる。しかし20世紀の言語学者 R. ヤコブソンも言ったように、テキスト全体として見ると翻訳は可能であり（Jakobson, 1959/2004）、現にこれまで実に多くの翻訳がなされてきた。そこで翻訳の理論的解明を行うにあたって、翻訳可能性を前提とし、翻訳を微視的に見た場合、原文と翻訳はどのようにズレるのかについて、翻訳シフトとして分析する必要がある。

一般的に（西洋の）翻訳研究では、翻訳シフトとは「起点テキストを目標テキストに翻訳するとき起きる小さな言語的变化」と定義される（Catford, 1965; Munday, 2008/2012）。しかしながらキャットフォードによる西洋言語

間を中心とした翻訳シフト論は言語を固定した構造体とみなした静的なシフト分析に立脚したもので、翻訳のダイナミズムの分析にはそぐわない。

実際の翻訳シフトには、二言語間の言語構造上の違いにより義務的な翻訳シフトが生じる場合と、任意的（選択的）な翻訳シフト、つまり個々の翻訳者にある程度委ねられた裁量によって翻訳実践のあり方がズレを生じる場合との2つが主にある（河原, 2014b）。これは翻訳行為に対する社会文化的制約の観点ともある程度パラレルである。Toury (1995/2012) は翻訳規範を効力（potency）の観点から捉えなおし、一方の極に絶対的規則（absolute rules）が存し、他方の極に純粋な特異性（pure idiosyncrasies）が存しており、翻訳規範はこの両極の連続体（cline）の中間に位置するとした。絶対的規則は義務的シフトに、特異性は任意的シフトに対応すると考えられる。

以上から、翻訳の言語的側面、社会行為的側面の両面において、義務的にシフトが生じる極と、翻訳者の個性として任意にシフトを生じさせる極とがあり、これらが翻訳者の意

識／無意識の反映となって現れる、という立論が可能となる。

そこで本稿では、これらの翻訳シフトと翻訳者の意識／無意識の関係について考察し、「シフトはなぜ起こるか」について予備的考察を行ってゆく。

2. 翻訳シフトが生起する複合的理由と翻訳者の意識／無意識の解明

「シフトはなぜ起こるか」という論点については、これまでの翻訳研究でも包括的にはまだ解明が進んでいない状況である。

シフト概念に解釈の多様性・相対性があるとすれば、分析の仕方によってもシフトの認定は多様になりうる。それは、一般に現象に概念を当てはめるといふ記述・発見的作業ないし記号操作は、構築行為であるからである。そもそもこれまでの翻訳シフトの記述法は主としてテキストベースの言語分析寄りのものであり、この背後には、言葉の意味は明確で固定的で安定した共通核・不変なるものがあり、それ以外はすべてシフトであるという考えが背後にある。つまり、これまでは単純な等価概念を基本に据えた言語／翻訳イデオロギー¹⁾を有した理論展開を行ってきたのである。

1) 「イデオロギー」について詳しくは河原(2015)が扱っているが、本稿では「イデオロギー」とは広義に捉え、idea(観念)に関わるもので、世界観・信念体系のこととする。これは象徴性が高い観念的な慣習的概念のことで、この観念ないし概念には意識化されたものだけでなく、無意識的なものも含まれる。そして「言語イデオロギー」(linguistic ideology; language ideology)は、言葉について我々が意識化していること、つまり、言葉について我々が考えていることである(小山, 2011, p.4)。この定義では意識化することをイデオロギー化すると位置付け、ボアス(F. Boas)的な伝統に従い、人が無意識に習慣的に遂行している実践行為が「意識化」(意識的な概念化や合理的解釈など)されたとき、歪んだ「合理化」を伴って認識され、この歪んだ認識が習慣的な実践行為を徐々に変容させるように働くとする。要するに、人は意識化されやすいものを選択的に認知・意味づけしてイデオロギー(観念)を形成し、そこには現実と意識とにギャップや歪曲が生じるのである。

いずれにしてもこれまでの翻訳の諸学説を検討すると、科学的研究への志向性が簡約化理論への誘因的契機となり、複雑な諸要因からモデル化・理論化可能なものを抽出し、そこからある種のトップダウン型で演繹的に説明・体系化しようとする傾向が看取される。しかしながら、各理論が背後に負っている理論負荷性について再帰的な考察がないまま議論を展開していることが、翻訳研究ないし翻訳学の持つ現在の最大の盲点であり課題でもある(以上、詳しくは、河原, 2014b, 2015を参照)。

そこで本稿は、これまで翻訳研究であまり扱われてこなかった翻訳テキストと翻訳者の意識／無意識の関係について、翻訳相対性の概念を導入しつつ、予備的な考察を行ってみたい。

3. 翻訳シフトの多層性の分析方法と分析対象

翻訳シフトの所在は多層的・多因的であって、単に原文と翻訳がズレるだけにとどまらない。①原文と翻訳とのズレ、②複数の翻訳間のズレ、③翻訳者による翻訳観(翻訳に対する意識)と実際の翻訳物(意識的・無意識的行為)とのズレ、の3つが主に考えられる。そこで翻訳が為された社会文化史上のコンテキストと併せながら、これらを総合的に論じることによって翻訳シフトが包括的に分析できることになる。

次に、翻訳シフトを分析するに当たって、どの単位に着目するかを論じる必要がある。M. ベーカーは(翻訳教育の)操作上、「等価」を5つの単位に分類した。(1)語のレベル、(2)語を超えたレベル、(3)文法のレベル、(4)テキスト構成のレベル、(5)語用論のレベル、の5つである(Baker, 2011)。(1)～(4)は言語構造、つまりコードの次元、

(5) は語用論、つまり言語行為の次元である（但し、テキストは語用論的（再）解釈行為の編成によって為されることに注視した言語学派では（4）も言語行為の次元に入れる）。

本稿では、翻訳シフトを同定するため、以上の5つを基軸とする。また、本稿は翻訳者の翻訳に関する意識／無意識を論じるために、翻訳テキストと当該翻訳者の言説が入手できるものとして、片岡義男と鴻巣友季子による『翻訳問答』（片岡・鴻巣, 2014）、村上春樹と柴田元幸による『翻訳夜話』（村上・柴田, 2000）を分析対象にして予備的考察を行う。

4. 翻訳シフトの多次元性と言語相対性の複層性

次に、翻訳者の意識／無意識が翻訳シフトといかなる関係にあるかに関連して、翻訳シフトの多次元性を論じるうえで重要な言語・翻訳「相対性」について論じる。そもそも翻訳が扱う「言葉」はラング（langue：言語）ではなくパロール（parole：語用）、静的テキスト構造ではなく動的（コン）テキスト過程の表出現象である。しかしながら、旧套の翻訳研究は前者をより前（全）景化させた論、つまり国民国家＝民族言語＝民族文化という一枚岩の言語が複数あり、その一枚岩の言語間での言語変換行為を扱う論、つまりは言語ナショナリズムを土台にした言語イデオロギーの産物であると言える（小山, forthcoming）。このような言語イデオロギーから展開したのは、「複数の言語」を比較対照するという言語理論、すなわち対照言語学や言語類型論の知見を応用した翻訳研究である。

しかしながら、本来的に翻訳がパロール（語用ないし言語使用）、すなわち翻訳というコミュニケーション行為の一回性・固有性を扱うものであるならば、一枚岩の「複数の言語」に照射するのみならず、同一の「言語の

複数性」にも照射する必要が出てくる（cf. 藤本, 2009, pp.43-44）。さらには、同一「言語の複数性」のみならず一回々々の「言説の複数性」にも照射する必要もある。つまり、サピア＝ウォーフ仮説で知られる言語相対論は、一般的に複数言語間の相対性のみ限定して論じているが、ここではその限定的な前提枠を拡大し、言語相対性の複層性を正面から認め、言語間／言語内／コミュニティ間／コミュニティ内／個人間／個人内の各相対性（但し、これらはすべて非離散的な範疇）を丹念に分析することで析出される結果を微細に見る必要がある（cf. Kay, 1996によるintra-speaker relativity）。そうすることで翻訳物の産出の際に翻訳者が紡ぎ出す言説の社会的なバラツキ／ズレが考察でき、以って言語間翻訳のみならず言語内翻訳まで含み込んだ記号間翻訳という本来の記号操作としての翻訳の営みを総合的に示すことができることとなる。

以上の議論を踏まえて、予備的考察を趣旨とする本稿では（1）語の単位でのシフト、（2）フレーズの単位でのシフト、の2つに絞ったうえで、まずは原文テキストと翻訳テキストとのシフトを同定し、次に複数の翻訳者がその翻訳単位の箇所についてどのような意識を持っているかについて分析してゆく。

5. 翻訳シフトと（再）翻訳における翻訳者の意識の関係の分析

片岡義男と鴻巣友季子による『翻訳問答』は2名の翻訳家がある英文を試訳し、結果を互いに検討しあうという翻訳テキストと翻訳言説テキストを併せて掲載した書籍で、「その1」において Jane Austen の *Pride and Prejudice* の冒頭を俎上に乗せている。それ以前の他の既訳5種も引用しており、巻末1に翻訳書の出典とともに掲載する（巻末の表1『翻訳問答』その1の Jane Austen 著 *Pride*

and Prejudice の冒頭箇所と複数の翻訳」参照)。

まずは、このように1文だけを取り出して分析することの方法論上の危うさを考える必要がある。テキストは文脈全体があって初めて個々のセンテンスが生きるわけであり、例えば単独の1文を取り出して分析する、ある統語論学派に見られるような研究手法に終始したとしても、せいぜい言語構造上の意味や文法上のシフトしか論じられず、翻訳における生き生きとした実際の姿(実際の言語使用における意味や文体上の息遣いなど)が解明できるわけではない。しかし、ここでは微視的に個別のセンテンスに着目してどのように分析するかを見たうえで、それを作品全体に対して行って、分析を積み上げてゆく必要があることから、まずは個々のセンテンスの分析手法について考えてゆくこととする。

5.1 翻訳テキスト分析(1): 語の単位でのシフト

[a single man] [a wife] を取り出すと翻訳(者)の男女観や作品の見方や解釈がわかる。「独りもの—細君」「独身の男—奥さん」「独身男性—花嫁」「独身の男性—妻」「独身の青年—妻」「独身の男—奥さん」「男は独り身で—妻」となっている。[a single man]を「独りもの」「独身の男」「独り身」と訳すと、オトコは結婚して一人前だという常識からオトコが独身でいることを若干揶揄するニュアンスがないわけではない。「独身(の)男性」であればニュートラルな表現であろう。「独身の青年」となると、「青年」のイメージから女性の結婚相手の対象という目線が感じられる表現とも受け取られる。

では [a wife] はどうか。「細君」は1963年という翻訳当時の時代が感じられる訳なのかもしれないし、あるいは原作の舞台の古さを

出すための翻訳上の効果なのかもしれない。「奥さん」だと男性と対等のイメージかもしれないし、「花嫁」だと男性の結婚相手の対象として対等に見ているかもしれない。「妻」はニュートラルな表現だと考えられる。

5.2 翻訳テキスト分析(2): フレーズの単位でのシフト

つぎに当該箇所をさらにフレーズ単位で見たい。[must be in want of a wife] を「細君／奥さんほしがっているにちがいない／はずだ」「花嫁募集中にちがいない」とすると男性が女性と対等な関係でパートナーを欲しているニュアンスとなるが、「どうしても妻がなければならぬ」「これはもうぜひとも妻が必要だ」となると「男たるもの、身を固めて一人前だ」という男性観が見え隠れする。また、「さあ、あとは妻を娶らなくては」という文言からは、「男」が「女」を「取る」という女性観が看取される。しかしこの訳語を当てたのは女性の鴻巣氏であり、訳文の冒頭に「世間一般にきまりきったことで」とあるように、原作が醸し出す当時の世間一般の女性観であるならば、このような訳語になると彼女が考えてそれを反映させたとも解釈できる。

このように原作が書かれた時代背景、原作が舞台としている状況の時代背景、翻訳者が翻訳した当時の時代背景(昭和ないし平成の日本)、翻訳者自身の男女観、などが錯綜して訳語が決定されることがこれらの分析から導かれる。翻訳者の男女観がストレートに翻訳に反映されるわけではなく、翻訳者の原文解釈上、原作当時の風潮や原作が舞台にしている場面の登場人物のものの考え方を解釈し、翻訳者が意図的・意識的にそれを反映させているという、いわば間接的な形での反映ではある。いずれにしても原文と翻訳はシフトを

生じている（3章の①原文と翻訳とのズレ）。また、これら7つの翻訳どうしもシフトを生じている（3章の②複数の翻訳間のズレ）。そしてズレには無意識裡のものの方・考え方、つまりイデオロギーが介在していることがわかる。

5.3 翻訳者の意識の多層性

ではさらに、翻訳者の意識とはどのようなものであるのかについて、「再翻訳」（retranslation）と関連させて論じてみたい。

小説の翻訳においてどのように等価を実現するかに関し、翻訳者の意識は①原文テキストの言語面へ向かうだけでなく、②そこから推し量られる原文の登場人物に関する解釈や設定場面の時代的背景に関する解釈、そして③原著者とその歴史的状況に関する解釈、などが多層的かつ複雑に入り組んだ状態で構成される。

では『翻訳問答』における冒頭の1センテンスにおける [It is a truth universally acknowledged] の解釈をめぐって片岡氏と鴻巣氏がどのような意識を持っているかについて分析する。

(i) 言語全般に関する意識

まずは言語表現行為全般に関する2人の意識について論じる。

- 最初の1ページだけでこうも書き手のうまさや態度、つまり、その作家のすべて（が）わかってしまう（片岡, pp.44-45）
- 言葉とは、それを使う人の意図とその能力である（片岡, p.45）
- 文章に人間が出るというのは、恐ろしいことでもあります。（鴻巣, p.45）

以上のように、言語を表現することそのもの

が著者の人間性や品性、能力の総体を表出するのだと述べている。これは当然ながら、翻訳という言葉表現行為にも当てはまるわけであり、翻訳者としての言語に関する自己意識も同時に表出していると思われる。『高慢と偏見』の冒頭をどううまく訳出できるかで翻訳者の真価がわかるという含みが感じられ、既訳との違いや、再翻訳をする新奇性や楽しさを読者と共有したいという想いも感じられる。

(ii) 翻訳全般に関する意識

では、翻訳者による翻訳全般に対する意識はいかなるものか。明示的に書かれた箇所を引用する。

- ぜんたいの雰囲気は翻訳者がどうとらえるかによって、まったく異なる訳になる（片岡, p.36）

このように、翻訳者自身、翻訳等価の相対性や多様性について意識していることがうかがえる。ここでは等価の相対性・多様性を翻訳者の主体的解釈行為に起因させている。

(iii) 当該作品（『高慢と偏見』）に関する意識 — 上記②

次に、個別の当該作品に対する翻訳者の意識について引用する。

- この小説はぜんたいにわたってたいそう通俗的な話なので、通読して人物の性格や展開をつかみ、雰囲気をきちんときめてからでなくては、訳すことが出来ませんね。（片岡, p.38）

以上のように、ひとつひとつの訳語選択が作品全体の解釈と連動し一貫した文体のなかで

決定されることを言い得ている。このことは翻訳者の意識に上りやすい事項であることもわかる。

(iv) 当該作家（オースティン）に関する意識——上記③

作品に関する意識と作家に関する意識とは連動している。以下の記述が2人の発言にある。

- オースティンは非常に皮肉がきいているというか、風刺的な作家でもあります。(鴻巣, p.38)
- オースティンはこの小説に描かれている、中産階級、アッパーミドルクラスのすったもんだに対して、常に批評的な視線を持っている。そして、この世界を喜んで読んでいる読者こそをオースティンは茶化しているという見方も出来る。とはいえ、ぜんたいにそれが不快ではないですね。(鴻巣, p.39)
- たいそう巧みな、余裕をもった書き手だと思います。余裕があるのは、作品としての態度が、すべてきまっているからです。(片岡, pp.39-40)

これらの言明により、翻訳者は原作者の「うまさや態度」「意図と能力」「つまり、その作家のすべて」に関する解釈をフル動員して一つ一つのテキスト解釈を具体的に行っていることがわかる。個々の訳語選択の積み重ねが文体全体を形成するわけであり、文体傾向ないし「作品としての態度」(片岡, pp. 39-40)を定めることではじめて個々の訳語選択も決まってくるのがうかがえる。

(v) 当該箇所に関する意識——上記①

言語に対する意識、翻訳に対する意識、作

家や作品に対する意識が集約するのが、具体的な言語テキスト上の特定の箇所の訳出をめぐり意識である。

- 「真理」「事実」などの訳語が考えられると思いますが、[…]この truth には、オースティンの仕掛けが入っているように思います。(鴻巣, pp.36-37)
- 私は、この truth は反語だと思います。「世間一般にはこう思われていますよね、だけど…」というニュアンスではないですか。(鴻巣, pp.38-39)
- その反語を意図的にややひねって表現しています。それによってこの作品に対するジェイン・オースティンの態度が決まっていることがわかります。(片岡, p.39)
- 「お金のある独身男性は、次は奥さんを探す」と皆さん思っているでしょうが…という投げかけが含まれています。truth と言うところでオースティンが軽くウィンクしていそうです。(鴻巣, p.39)

5種類の既訳は [truth] を「真理」「公認真理」と訳しているところ、オースティンの意図や作品の時代背景を深く深く掘り下げ、既訳との差別化と自らの新奇性・卓越性を打ち出すために、このような解釈意識を明言しつつ自らは、「世のなかの誰もが認めることだ」(片岡)、「世間一般にきまりきったことで」(鴻巣)と訳している。オースティンの人物傾向や作品に込めた意図に関するオリジナルの解釈を忠実に自身の訳文に反映させたいという翻訳者としての意図や望みが如実に現れていると考えることができよう。

以上のように、翻訳等価に対する翻訳者の意識はマクロなレベル(上記②③)において極めて複層的であり、個々の翻訳ユニット(巻末表1で「/」を入れて示した単位)と

いうマイクロなレベル（上記①）における翻訳者の主体的解釈を多様かつダイナミックに規定するのである。

5.4 （再）翻訳の意識と翻訳シフト

それでは、なぜ片岡と鴻巣は既存の翻訳がある作品を題材に再翻訳を行い、自らの翻訳について語るのだろうか。最も大きな理由は、著名な翻訳家が言葉の遊びのように愉快地に翻訳し、自身の翻訳について楽しく対談することが出版ビジネスとしてヒットするからであり、このこと自体は翻訳業界の発展には大変喜ばしいことである。

このことを理論研究の視角から検討する。一般に文学分野の「再翻訳」(retranslation)は原作の多様で幅広い解釈へとつながるため肯定的に捉えられている。ところがそこには再翻訳という現象の複雑さもある。(以下, Gürçağlar, 2009 を参照している。特に, 英語以外の言語による資料は Gürçağlar, 2009 からの引用である。)

この再翻訳に関しては、まず再翻訳仮説というのをフランスの翻訳研究者 A. ベルマンが唱えた (Berman, 1990)。文学の再翻訳に限定すると、翻訳とは不完全な行為であり、再翻訳を通じてのみ完成を目指しようと主張した。ところがこのような再翻訳の経年発展説はロゴス中心主義の進歩史観モデルであるとの批判もある (Gambier, 1994)。また A. ブリセは「新奇性」を出すためだと主張した (Brisset, 2004)。これは村上春樹氏が言う「翻訳賞味期限論」とも関係するが (村上・柴田, 2000, pp.81-86), 目標言語の変化や言葉遣い・専門用語の更新・現代化の必要性などから翻訳の経年劣化があるためだという。以上が再翻訳仮説であるが、さらに複雑な社会的要因を見てみよう。

諸々の研究によると再翻訳がなされるのは、

目標言語社会における言語的・文体的規範の変化により「読みやすさ」を重視した再翻訳がなされる場合 (Brownlie, 2006), 原作を受容するイデオロギ的背景の変化が目標言語社会にある場合, 原作の国のイメージの変容による場合 (Kujamäki, 2001), 再翻訳によって目標文化内でその作品の位置づけを変える場合, 既存の社会的機関などの権威を再確認する場合 (Venuti, 2003), 再翻訳する翻訳者が既訳の存在に気づいていなかった場合, 出版社間の連絡・調整が不十分で結果として2種類の翻訳がほぼ同時に出してしまう場合, 原作の改訂版や拡大版の出版に伴う場合, 最初の翻訳におけるミスや誤訳を発見した場合, それまでとは異なる読者層を対象として新規に読者層を開拓しつつ原作の新しい解釈を示し方向性を定めなおす場合 (Gambier, 1994; Jenn, 2006), 名作文学の再翻訳の場合は威信があり費用効果が高く売上が保証されているため (Milton, 2001; Venuti, 2003), など様々な動機が緊張し競合し合っている。

ただ、ここで見逃してはならないのは、自らのアイデンティティを明示したいという再翻訳者の行為主体性である。この点、アメリカの翻訳研究者 L. ヴェヌティは再翻訳が行われるのは先行翻訳との相違を明らかにすることで自らの正当性を主張するためだと述べる (Venuti, 2003)。あるいは、翻訳ストラテジーをめぐる先行翻訳の訳者との見解の不一致を表明するためだと主張する見解もある (Pym, 1998)。また、S. ハンナはブルデュー社会学を援用し、再翻訳は自らを先行翻訳より「卓越化 (distinction)」させるためだとし、先行翻訳の欠点を指摘しその威信を傷つけようとするものや、先行翻訳では成し得なかった役割を目標文化内で果たすことを狙って再翻訳をするものがあるという (Gürçağlar, 2009)。いずれにしても、ヴェヌティによる

「再翻訳は翻訳者の意図を顕にするもので、再翻訳は先行翻訳との明確な違いを意図して行われる」という言明には一面の真理がある (Venuti, 2003, p.29)。

しかしながら、目標言語社会には翻訳者だけでなく翻訳会社、出版社、読者など多層にわたる人々や機関が関与している。その中において、再翻訳者が新解釈を打ち出したいという欲求と、新解釈を抑制すべきであるという動機とをめぐって、個人と機関の間で不断のせめぎ合いが繰り返られるのが実際である。

片岡・鴻巣両氏による、抑制や検閲のないのびのびとした再翻訳の試みと自らが翻訳について語る対談とで構成される翻訳論エッセイを、「挑戦的で明晰、そしてなんとも魅力的」であり「びりびりするような魂のバトル」(同書の本の帯)として出版社(左右社)が打ち出し、広い読者によって受容されていることは、現代の日本で見られる興味深い現象であり、日本の翻訳文化の発展に確実に寄与していると言えるだろう。両氏の発言から察せられるのは、当該再翻訳の提示により、新奇性、卓越化、先行翻訳との明確な違いなどを表出して、自らの解釈を正当化しつつ、翻訳に関する言説を並置させることにより自らの正当性を主張しているものであり、これらの複合的な営みが包括的に出版ビジネスとして商品価値があり、市場において受容されるというのが、現代日本の出版翻訳市場の一幕な

2) 「文体」については本稿では立ち入る紙幅はないが、さしあたり「文体」とは「文やその諸要素のような言語に固有のミクロ構造レベルに現れる一[中略]構造 structureよりはむしろ織物 texture のレベルに現れる一言説の形式的な属性」であり(ジュネット, 2004 [1991], pp.113-114), 「表現主体によって開かれた文章が、受容主体の参加によって展開する過程で、異質性としての印象・効果をはたす時に、その動力となった作品形成上の言語的な性格の統合である」(中村, 1993, p.162)と捉えることができる。翻訳研究では、「文体」はテキスト上の形式的な属性で何らかの異質効果をもたらす特徴と考えられよう。

のである。これらの翻訳者の多層的な意識が複合的な要因となって翻訳等価ないしシフトのあり方を決定していることがわかる。

6. 翻訳シフトと(再)翻訳における翻訳者の無意識の関係の分析

次に、③翻訳者による翻訳観(翻訳に対する意識)と実際の翻訳物(意識的・無意識的行為)とのズレ、特に同一の翻訳者による同一作品のなかにおける訳出のズレと翻訳者の意識・無意識について見てみたい。ここでは、翻訳者による翻訳観(翻訳に対する意識)に関して2名の翻訳者の文体に関する翻訳論を検討し、つぎに実際の翻訳物(意識的・無意識的行為の結果物)を検討して、意識が翻訳物とどのように一致し、どのようにズレているかについて、名詞の訳出分析をとおして分析する。

分析対象は、村上春樹と柴田元幸による競訳である(村上・柴田, 2000)。競訳を選択した理由は、翻訳の目標言語内における翻訳の相対性を論じるに当たり、同一の原文に対する複数の訳文を比較することで翻訳者間の翻訳相対性を分析し、そしてその分析をベースに、同一翻訳者内でのシフトを見るためである。

6.1 村上春樹・柴田元幸『翻訳夜話』の翻訳言説

この二人が『翻訳夜話』で語っているのは、突き詰めると、翻訳における〈文体〉のことである²⁾。

- ・僕は翻訳者としてはどちらかといえば逐語訳です。一語一句テキストのままにやるのが僕のやり方です。(村上, p.20)
- ・直訳で実はいいんだと。(柴田, p.20)
- ・僕の場合はそれはリズムなんです。呼吸

と言ひ換えてもいいけど […] 僕は場合によってはテキストを僕なりにわりに自由に作りかえます。[…] 表層的にはなく、より深い自然なカタチで日本語に移し換えたいと思っているからです。[…] そんなに単純に「直訳派」「意識派」と区切れないところはあります。厳密に言えば。(村上, pp.21-22)

- 逐語訳と意識の話になるんだけど、翻訳の訳文というのは、右の極端と左の極端との真ん中のどこかにあると思うんです。極右、こっちは身も蓋もないエリアなわけです。極左、こっちはやはり身も蓋もないエリア。で、そのふたつの真ん中に「身も蓋もある」エリアがあるわけなんです。それをどうして見つけるかという、 […] 識別する個人的な能力が必要なんです。(村上, p.23)
- 何が自分にとっていちばん「身も蓋もある」かという見極めを、長い時間をかけて自分でこつこつとやっていかななくちゃいけないですよ。これは誰かに教えられないものではなくて、その人にしかできないことだし、それがそのまま翻訳者の世界観にもなるわけです。(村上, p.24)
- やはりセンスですね。(村上, p.25)
- 翻訳をするときには、何はともあれ原文のリズムをうまく日本語に移し換えるということを意識します。(村上, p. 30)
- 文体ということ言うと、 […] 「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」というやつで。(村上, p. 35)
- とにかく相手のテキストのリズムというか、雰囲気というか、温度というか、そういうものを少しでも自分のなかに入れて、それを正確に置き換えようという気持ちがあれば、自分の文体というのはそ

こに自然にしみ込んでいくものなんですよ。(村上, p.36)

- やっぱり自分ではできるだけゼロになるのが原理的にはいいんですけど、まあ、でもいやでも残っちゃうでしょうね。(柴田, p.89)
- 一つ一つの作品に、なんというのかな、もともと自分が持っているスタイルをそれにおしつけるんじゃない、書いているうちにその文章そのもののスタイルがだんだんと立ち上げてくるみたいになうのが理想だと思うんですよ。(柴田, p.91)
- 翻訳者というのはあくまで黒子であるべきですよ。極端な言い方をすれば、読んでいて「うまく翻訳だな」と読者に感じさせること自体が、悪訳の証であるということにもなるかもしれない。(村上, p.109)

これを概括すると、両氏は逐語訳・直訳を基本に据えつつ、自らを一枚岩的に直訳派／意識派と割り切ることは難しい。自然な日本語に訳すにはリズムや呼吸が大事で、絶えず両者のはざまを行き来しながら落ち着き処を見据える必要がある。それには長年かけて培ったセンスが必要で、原文のもつ雰囲気・リズム・温度を自分のなかに取り込み、それを正確に置き換えることが大切である。そして自分は可能な限りゼロになることが大事で、翻訳者は黒子であるべきだ、ということになる。

6.2 二人による競訳 — 名詞の訳出とアイデンティティ

作家の村上春樹が翻訳した Raymond Carver の *Collectors* という作品（失業中の30代と思しき男のもとへ、その家人に懸賞が当たったと部屋の中まで入ってきた男が、カー

ペットやいろいろな部屋にあるものを電気掃除機で掃除をして去っていく話)を、翻訳家の柴田元幸が再翻訳したものである。ここでは例として、名詞の訳出から翻訳シフトについて分析する。(ここでは語のレベルのシフトに焦点を当てて分析を行うが、翻訳においてはさまざまなレベルでシフトが生じ、それらが多層的・重層的に相互関連して全体を構成していることは見逃してはならない。分析の便宜として今回は語のごく一部である名詞表現に着目して、翻訳シフトの実際的一端を論じてみるという趣旨である。) (巻末の表2「Raymond Carver 著 *Collectors* の競訳 — 名詞の訳出の対照表」参照。以下の分析に關し、河原, 2014c を一部引用している。)

まず主な傾向として読み取れるのは、村上訳のほうがカタカナ語を多用している点である(①ポーチ, ④サウス・シックス・イースト, ⑥エレガントな, ゴージャスな, ⑧クローゼット, ⑩アタッチメント, ⑪アドレス, ⑫シャンプー, ⑬バックル, ⑭カーペット・シャンプー)。カタカナは音訳(音写)の一種であり、「直訳—意識」の二項対立でいえば原文の音韻的な等価性を再現するという意味で直訳の要素が強い。言及指示している対象自体は、①であれば「ポーチ」であれ「玄関先」であれ、同じである。二言語間シフトの点からすると、「ポーチ」は音韻的等価性を、「玄関先」は意味的等価性を、それぞれ求めた訳語ということになる。

しかしながら、社会的な意味でのシフトの点からすると、大きな差が認められる。カタカナ語の訳語を選択した場合、日本以外の異国情緒を想起させてしまう。日本人読者にとっては、異質なものを、日本的ではない何か、が連想される(これは異質なものを異質として受容化するものであり、本稿では「異質同化」と呼ぶ)。他方、②mailmanを村上は「郵便配

達夫」と訳し、柴田は「郵便屋」と訳しているが、現在の日本語話者の平均的な読者であれば、おそらく「郵便屋」のほうが使用頻度も多く一般的だと思うであろう。「郵便配達夫」とわざわざ訳出することによる日本語における何らかの「異質なもの」、つまり、「同質異化」という意味での異化作用を持った訳語を選択していることがわかる(おそらくはこの“mailman”の存在自体をテキスト上前景化させる効果を狙っているとも考えられる)。村上は、異質同化(domesticating the unfamiliar), 同質異化(foreignizing the familiar)によって何らかの効果を持たせていることが観察される³⁾。これは、⑤や⑮も同様で、わざわざ「電気」掃除機、「真空」掃除機、と訳出したところに、微妙な異質性を感じさせる。このことを社会的意味の等価性の観点から考えてみたい。まず訳語の選択によって、そこで言われていることがどういう社会状況で起きているのかについての等価性を表出することになる(これを言語の一次的社会指標性と言う)。そして、そのような訳語を選ぶ行為によって、その翻訳者の使用する翻訳ストラテジー、翻訳者のアイデンティティや翻訳イデオロギーを表出している(これを言語の二次的社会指

3) 本稿は「異質化」ないし「異化」を下位分類して「異質同化」「同質異化」と称することとする。

「異化」というと、シクロフスキー(Viktor Borisovich Shklovskiy; V. Shklovsky)が「方法としての芸術」(『散文の理論』所収)で示した概念(Остранение; defamiliarization/ostranenie)で、日常言語と詩的言語を区別し、自動化された状態にある日常の事物を、初めて見るもののように、その存在そのものを感じとれる形で描出し、「生の感覚」をとりもどすための芸術の一手法であるとし、自動化(automatization)との対概念として定立したロシア・フォルマリズムを代表する概念のひとつであり、そしてこれがブレヒト(B. Brecht)の演劇上の概念である「異化効果」にも影響を与えた。翻訳でも「異質同化」「同質異化」による「異化効果」が翻訳者によって意識されることは頻繁にあるだろう。

また、「同化」というと、文化接触研究において異文化滞在者や移民などが移動先の新しい文化的要素を取り入れて自己の中に内在化させることを指す。母文化のアイデンティティ保持や母文化出身

標性と言う)。村上は現代の日本語での使用頻度が必ずしも高くないカタカナ語（異質同化）や日本語（同質異化）を選好することで異化効果を狙った翻訳を行うという翻訳傾向と翻訳者アイデンティティを表出し（⑨⑩の度量衡の訳出にもそれが現れている）、柴田は日本語訳としての典型例（プロトタイプ）に順応した訳語を選好するという翻訳傾向と翻訳者アイデンティティを表出している。これが同一翻訳者のテキストから見えてくる無意識の翻訳行動パターンである。この無意識と、前項で示した意識化された翻訳論言説とが微妙にズレていることが興味深い翻訳シフトの一つの大きな要因となっている。

そして、留意する必要があるのは、このような訳出傾向、翻訳者アイデンティティが一般傾向として観察されたとしても、例えば柴田による③⑦の訳語選択は、柴田の一般傾向に反するものであり、それにより文体の流れにある種の「弾み」と「面白み」を増す効果を持たせているとも考えられる。つまり、自ら定立した傾向からシフトさせる／逸脱するという個人内の言説の相対化やゆらぎを示す現象も見られるのである。

このように翻訳においては、翻訳者が自身

者との交流に否定的な態度を持つ場合を同化（assimilation）、両者に肯定的な態度を持ちつつ新しい文化を内在化する場合を統合（integration）として概念を区別している（小柳，2013）。これは行為者側から見た社会心理である。また、平野（2000）は、文化触変の観点から、外来文化要素を受け入れることを「受容」（acceptance）、受け手文化の人々が外来要素を積極的に受容し自己を変容させることを認める場合を「同化」（assimilation）としている。そして国が同化を強制すること、文化を変えさせようとすることを「同化政策」と呼ぶ（平野，2000，p.110）。これは受け手ないし受け入れ国の側の心理的態度ないし政策である。このように異文化適応論や国際文化論に言う「同化」「受容」は、翻訳研究のものとは異なっている。と同時に、本来翻訳研究においても「異質化」「受容化」を文化触変論や異文化適用論、社会心理学（アコモデーション理論；集中・収斂か逸脱・分岐か）や国際社会学や言語政策論などの文脈の中で、言語面と社会文化面の相関として論じていく必要があることを付記しておく。

の同一テキスト内部において、意識的、かつ、無意識的に翻訳傾向と翻訳者アイデンティティを表出し、その意識と無意識とが絶妙にズレている点と、同時にその翻訳傾向にある種の揺らぎやズレが発露し、当該作品の文体やリズムを生みながら絶妙に翻訳者のアイデンティティを表出している点が、③翻訳者による翻訳観（翻訳に対する意識）と実際の翻訳物（意識的・無意識的行為）とのズレとなって翻訳シフトを構成しているのである。

7. まとめ

本稿は翻訳シフトの要因に関する予備的考察として、①原文と翻訳とのズレ、②複数の翻訳間のズレ、③翻訳者による翻訳観（翻訳に対する意識）と実際の翻訳物（意識的・無意識的行為）とのズレ、の3つについて検討した。従来は二言語間の言語構造に由来する①を翻訳シフトとして扱い、分析の対象としてきた（言語間翻訳におけるシフト）。しかしながら、翻訳シフトの多因性に鑑みると、②目標言語内での翻訳主体間でのシフトと、同一翻訳者内でのシフトの重大さも決して見逃すことができない（言語内翻訳におけるシフト）。そして、③翻訳者は①に関するシフトを通常意識化したり、再翻訳の場合には②の翻訳主体間でのシフトを意識化したりすることはあるが、②の同一翻訳主体内部での揺れやズレについては明確な意識化を行っていないことが、本稿で扱った4名の翻訳者による翻訳言説からわかった。

フィクション翻訳の翻訳者は通常、意識を起点テキストの言及指示内容と一次的社会指標内容（原文の登場人物に関する解釈や設定場面の時代的背景に関する解釈の内容）および二次的社会指標内容（原著者とその歴史的状況に関する解釈の内容）へと向ける。それと同時に、目標テキストの言及指示内容（原

文テキストと翻訳テキストとで言語的に等価裡に翻訳をなし得ていること)と一次的社会指標内容(翻訳テキストが原文テキストの登場人物に関する解釈や設定場面の時代的背景に関する解釈を目標言語社会で等価裡に再現できていること)は意識化するが、目標テキストの二次的社会指標内容(翻訳者自身のアイデンティティやその揺れ、シフト)を意識化の対象に明確にはしていないことがわかる。自身の翻訳者としてのアイデンティティの一貫性については、「原著者のうまさ、態度、意図、能力、雰囲気をつかむこと」と表現したり、「リズムや呼吸、長年かけて培ったセンス、原文のもつ雰囲気・リズム・温度を自分のなかに取り込みそれを正確に置き換えること、自分は可能な限りゼロになることが大事」と表現したりしながら、一貫した翻訳方針を取っていることを意識化するものの、③翻訳者による翻訳に対する意識と実際の翻訳物とのシフトの実態については個別具体的な把握はそれほどなされておらず、特定の箇所の訳出方法と自らのアイデンティティを同定することはあるが、翻訳テキスト全体における当該翻訳者らしい文体形成は無意識裡になされていることも多いことが、名詞の翻訳の異質性の分析から明らかになった。

本稿は翻訳シフトの要因に関する予備的考察であるため、ごくわずかな事例によって暫定的な仮説を設定する試みを行ったにすぎない。したがって、今後は本稿が提示した仮説を多くの事例分析によって修正してゆくことが求められる。その際、「翻訳相対性」という概念で示される翻訳シフトの多様性が何に起因するかについて、①言語相対性の複層性(言語間/内、コミュニティ間/内、個人間/内における言語相対性)、②翻訳シフトの多層性(語のレベル、語を超えたレベル、文法のレベル、テキスト構成のレベル、語用論

のレベル)、③翻訳シフトの多次元性(原文と翻訳とのズレ、複数の翻訳間のズレ、翻訳者による翻訳観と実際の翻訳物とのズレ)、④翻訳者意識の多層性(原文・翻訳両テキストの言語面に対する意識、(フィクションの場合)原文の登場人物や設定場面の時代的背景に対する意識、原著者とその社会文化的な状況に関する意識、これらが目標言語社会で等価裡に再現できていることへの意識、自身の翻訳者としてのアイデンティティに関する意識、そして無意識裡の領野)、などを包括的に有機的一体化させて複眼的に分析してゆくことが必要となる。無論、これらに起因する翻訳シフトは既往の翻訳研究の諸学説が扱うテキストタイプ論、多元システム論、規範論、法則・普遍性論、リライト理論、翻訳者不可視性論などなどの諸論点と有機的に結びつけて論じる必要がある。

謝辞

本稿は科学研究費の補助を受けて実施している研究「英日翻訳における翻訳等価性の研究」(基盤研究(C)課題番号16K02705)の成果の一部である。記して感謝申し上げる。

参考文献および翻訳資料

- Baker, M. (2011). *In other words*. London & New York: Routledge.
- Berman, A. (1990). "La retraduction comme espace de la traduction". *Palimpsestes* 4, 1-8.
- Brisset, A. (2004). "Retraduire ou le corps changeant de la connaissance. Sur l'historicite de la traduction". *Palimpsestes* 15, 39-67.
- Brownlie, S. (2006). "Narrative theory and retranslation theory". *Across languages and cultures* 7(2), 145-170.
- Catford, J. C. (1965). *A linguistic theory of translation*. Oxford: OUP.
- Gambier, Y. (1994). "La retraduction, retour et de-tour". *Meta* 39(3), 413-417.

- Gürçağlar, Ş. (2009). "Retranslation". In Baker, M. & Saldanha, G. (Eds.), (2009). *Routledge encyclopedia of translation studies*. (pp. 233-236). London & New York: Routledge
- Jakobson, R. (1959/2004). "On linguistic aspects of translation". In Venuti, L. (Ed.), *The translation studies reader*. (2nd ed.) (pp. 138-143). London & New York: Routledge.
- Jenn, R. (2006). "From American frontier to European borders". *Book history* 9, 235-260.
- Kay, P. (1996). Intra-speaker relativity. In J. J. Gumperz & S. C. Levinson (Eds.), *Rethinking linguistic relativity*. pp. 97-114. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kujamäki, P. (2001). "Finish comet in German skies. Translation, retranslation and norms". *Target* 13(1), 45-70.
- Milton, J. (2001). "Translating classic fiction for mass markets". *The translator* 7(1), 43-69.
- Munday, J. (2008/2012). *Introducing translation studies*. London & New York: Routledge.
- Pym, A. (1998). *Method in translation history*. Manchester: St Jerome.
- Toury, G. (1995/2012). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Venuti, L. (2003). "Retranslations: The creation of value". *Bucknell review* 47(1), 25-38.
- 藤本一勇 (2009). 『ヒューマニティーズ 外国語学』岩波書店.
- ジュネット, G. (著), 和泉涼一・尾河直哉 (訳) (2004). 『フィクションとディクシオン—ジャンル・物語論・文体』水声社. [原著: Genette, G. (1991). *Fiction et diction*. Paris: Seuil] .
- 平野健一郎 (2000). 『国際文化論』東京大学出版会.
- 片岡義男・鴻巣友季子 (2014). 『翻訳問答—英語と日本語行ったり来たり』左右社.
- 河原清志 (2014a). 「翻訳等価論の潮流と構築論からの批評」日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト (編) 『翻訳研究への招待』第11号, 9—33頁.
- 河原清志 (2014b). 「翻訳シフト論の潮流と社会記号論からのメタ理論的総括」『金城学院大学論集』第11巻第1号, 7—30頁.
- 河原清志 (2014c). 「英日翻訳の多次元シフト—名詞・代名詞をめぐる—」『金城学院大学論集人文科学編』第10巻第2号, 46—64頁.
- 河原清志 (2015). 「翻訳学におけるイデオロギー研究の潮流の社会記号論による分析」『金城学院大学論集人文科学編』第11巻第2号, 40—57頁.
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論』三元社.
- 小山亘 (forthcoming). 「記号論と翻訳論の地平: 接触, 出来事, メタ語用」[未刊行原稿].
- 小柳志津 (2013). 「同化と異化 assimilation & differentiation」石井敏・久米昭元 (編集代表) 『異文化コミュニケーション事典』(185—186頁) . 春風社.
- 村上春樹・柴田元幸 (2000). 『翻訳夜話』文芸春秋.
- 中村明 (1993). 『日本語の文体 文芸作品の表現をめぐる』岩波書店.

巻末表

表1 『翻訳問答』その1のJane Austen著 *Pride and Prejudice* の冒頭箇所と複数の翻訳

出典(年代)	テキスト
原文(イギリス, 1813年)	It is a truth universally acknowledged, / that a single man / in possession of a good fortune, / must be in want of a wife. /
1963年中野好夫訳『自負と偏見』(新潮文庫)	独りもので、／金があるといえば、／あとはきっと細君をほしがっているにちがいない、というのが、／世間一般のいわば公認真理といってもよい。
1994年富田彬訳『高慢と偏見』(岩波文庫)	相当の財産をもっている／独身の男なら、／きっと奥さんをほしがっているにちがいないということは、／世界のどこへ行っても通る真理である。
2003年中野康司訳『高慢と偏見』(ちくま文庫)	金持ちの／独身男性は／みんな花嫁募集中にちがいない。／これは世間一般に認められた真理である。
2006年阿部知二訳『高慢と偏見』(河出文庫)	独身の男性で／財産にもめぐまれているというのであれば、／どうしても妻がなければならぬ、というのは、／世のすべてがみとめる真理である。
2011年小尾美佐訳『高慢と偏見』(光文社古典新訳文庫)	独身の青年で／莫大な財産があるといえば、／これはもうぜひと妻が必要だというのが、／おしなべて世間の認める真実である。
2014年片岡義男訳『思い上がって決めつけて』(『翻訳問答』)	金運にめぐまれた／独身の男は／奥さんを欲しがらねばとは、／世のなかの誰もが認めるところだ。
2014年鴻巣友季子訳『結婚狂想曲』(『翻訳問答』)	世間一般にきまりきったことで、／男は独り身で／財産があるとなれば、／さあ、あとは妻を娶らなくては、という話になる。

(便宜上、意味のまとまり(チャンク)に「/」を入れている。)

表2 Raymond Carver著 *Collectors* の競訳 — 名詞の訳出の対照表

原文	村上春樹訳	柴田元幸訳
① porch	ポーチ	玄関先
② mailman	郵便配達夫	郵便屋
③ Mr. Slater	スレーターさん	ミスター・スレイター
④ Two-fifty-five South Sixth East	サウス・シックス・イーストの二五五番地	東六丁目南、二五五番地
⑤ a vacuum cleaner	電気掃除機	掃除機
⑥ the plush carpeting and the luxurious reclining seats	エレガントな敷物やらゴージャスなリクライニング・シートやら	ビロードの敷物や豪華なリクライニングシート
⑦ slipped the case from the pillow	枕のカバーを外し	枕からピローケースを外して
⑧ opened the closet door	クローゼットの戸を開けた	押入れのドアを開けた
⑨ a twelve-by-fifteen cotton carpet	縦横十二フィート、十五フィートのコットンのカーペット	三×四メートルの綿のカーペット
⑩ put another attachment on the house	別のアタッチメントをホースにつけた	別の部品をホースにつけて
⑪ looked closely at the return address	差出人のアドレスをしげしげと眺めた	差出人の住所氏名をしげしげと眺めた
⑫ I just shampooed it.	今シャンプーしたばかりですからね。	洗浄したばかりですから。
⑬ buckles	バックル	留め金
⑭ free vacuuming and carpet shampoo	無料の掃除機サービスとカーペット・シャンプー	無料掃除機かけと、カーペット洗浄
⑮ This little vacuum	この小さな真空掃除機	この小型掃除機